



芦屋市合同慰霊祭（県立芦屋南高等学校）

—震災体験は語る—

生と死の狭間で

十二時にサイレンが町中にひびいた

北淡町立富島小学校6年 伊原友理

もくとうをするから目をつぶった

あおいのことを思い出すと泣きたかった

でも泣きたくなかった

私は学校の校舎にいる

私は中学校に、はいったりするんだ

でも、あおいとかつやは中学校に、はいらない

はいられないんだ

ずっとあおいは十一才でいるんだ

あおいとほとつても仲が良かった

でも、ケンカもした

会いたい

また遊びたい

いっしょにバレーしたい

話をしたい

あおいはひよこつと顔だしてこないかな

声をかけてくれるんじゃないかな

「ゆりちゃん」

あおいがよんでくれそうなきがする

わたしはあおいのことはわすれない

そういえばあおいは

私の身長をぬくつて言ってたっけな

私はぬいてほしかった

一九九五年二月十七日

あの日から一か月



神戸市立福池小学校3年 西川雅人

子どもたちのとらえた大震災

じしんがきたよ

神戸市立高羽小学校2年
すず木ようすけ

1月17日にじしんがきて、オルガンがたおれた。

ふとんの中で「わはは」とわらった。おかあさんがなくて

しずかだったから、

ぼくは、わらった。

いつも、げんきなおかあさんが、

なっていたよ。

地しんがおこって

北淡町立富島小学校3年 岡本正美

わたしは、小さな地しんのときに1回おきました。それで、ベットの上に1回すわりました。すると、大きな地しんがきてこわくなってふとんにもぐりました。そしてゴーという音といっしょに天井が落ちてきました。ななめになった反対がわにいたので下じきにはなりません。でも、とてもこわくて「死ぬのかなあ」と、思いました。そう思うと悲しかったです。死にたくないと思いました。その時、お父さんの声がしました。お父さんは、少し見えたわたしの足を見て「まさみ」と、さげびました。わたしは、「お母さん」と、さげびました。

お父さんがベットの板を1まいか2まいぬきました。できたすきまからわたしの足をひっぱって出してくれました。それでお父さんにだかれて、やねからでました。お母さんのところまでいきました。お父さんにだかれたまんま泣いてしまいました。

地震とぼく

神戸市立福池小学校5年 山根吉幸

5時46分、兵庫県南部に思ってもいないことが起こった。大地震が起こったのだ。ガス、水道、電気が止まった。

ぼくは、いつもタンスの前に寝ていた。この地震で、ぼくはタンスの下敷きになり、息ができなかった。苦しかった。

地震の前に、お父さんはトイレに行っていたらしい。あの地震でお父さんが言うには、トイレでとび上がったらしい。だから、お父さんはぼくと妹を助けてくれた。

それからだいぶ余震が続いた。気持ち悪かった。

お父さんが足を切ったから、すぐぼくたちにくつをはくよう言った。急いで何でもいいからくつをはいた。

知り合いのおばちゃんも救助され、家に来た。ぼくたちは、いろいろな食物を探して食べた。地震はほんとうにこわいんだなと思った。

さよなら かっちゃん

北淡町立富島小学校2年 くら下はや人

地しんがあった

かっちゃんが家の下じきになって

なくなった

さびしくてつらかった

いつもあそんでくれたのに

少林寺も教えてくれたのに

地しんからかっちゃんが

いなくなった

かっちゃん

天国で見ていてね

きっと初だんとるからね

さようなら さようなら

かっちゃん さようなら

大地しん

神戸市立高羽小学校3年 中原しょう太

1月17日に、しん度7の地しんがきた。ぼくは、ドンと音がしたら、はっと目をさました。それで、ふとんの中にもぐりこんだ。お父

さんとお母さんがふとんを上において、ぼくをかばった。

こわかった。家がつぶれると思った。ジェットコースターよりこわかった。神戸にはじしんは、こないと思ったんだけど、お父さんとお母さんは、ふとんの上ののって、ぼくを、また、かばった。ぼくたちだけでも生きていいと思っているんだ。

じしんは、もちろんすごくこわかった。でも、そのとき、ストーブをつけてなかったから、家がやけなくてよかったなと思う。まだゆれている。よほどながかったからだ。すると、どんどん物がたおれていったから、タンスもたおれて、死ぬかと思ったよ。バリバリと、どんどん、どんどん、ひびがはいった。でも、一か所、だけだったよ。こわいし、ブルブルふるえていたよ。

電気までもが、きえちゃったから、たいへんだった。またかべがひびわれた。きっと、となりのへやの、ピアノまでもが、あの大きなじしんでゆれて、かべにぶつか

ったんだと思う。きぶんわるくなる。ジェットコースターみたいに、気分がわるくなりそうだった。ガタン、ガタンと、電車みたいにゆれた。

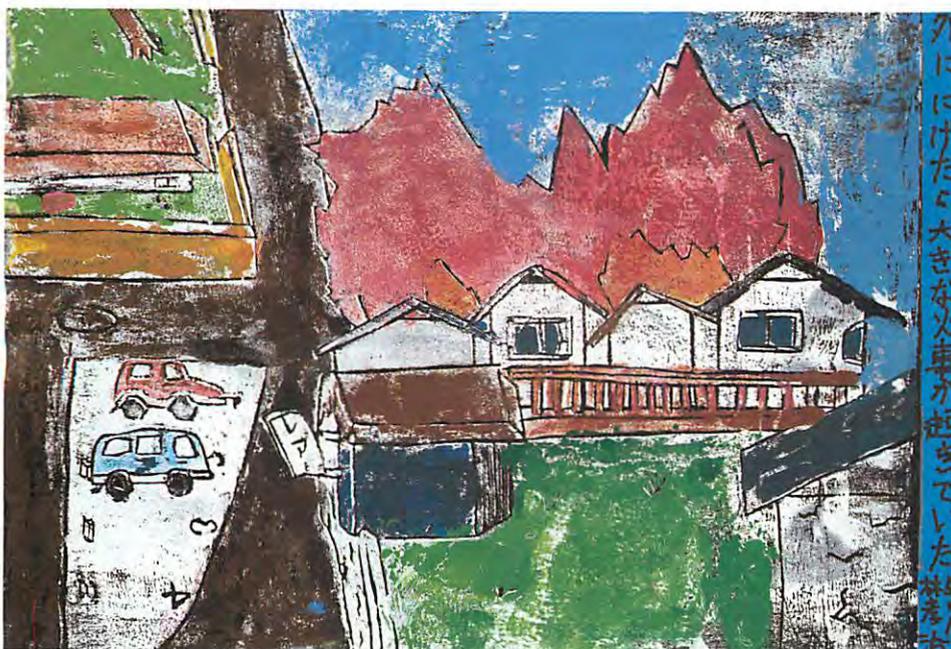
岩と岩がぶつかりあって、地しんがゆれている。ものすごく岩がぶつかりあって、ものすごくゆれている。ゴゴゴゴとか、ドーンとか、音がなっている。すごい音だ。ものすごくこわかった。

モチモチの木の豆太みたいに、なきそうだった。ゆれる、ゆれる、どんどんゆれる。今までなかった地しんだ。こわくて、こわくて、ふとんの中であばれだした。ようやく、おわった。でも、へやの中はむちゃくちゃだった。

神戸をおそった大地震

神戸市立福池小学校6年 藤尾佳代子

今まで地震はおもに北海道のことが多かった。でも、地震は神戸をおそった。こわかったけど、外の風景を見て震度7の地震があんなにすごいとは思わなかった。外



「外ににげたら大きな火事が起きていた」
神戸市立高羽小学校5年 林 孝治

の風景は線路が曲がったり、マンションがかたむいたり、1階がつぶれたり、地面がでこぼこになったりしていた。

当日は、家でふるえて、大きな家具をなおしていった。1日目は、お父さんが昼まで帰ってこなかった。それは、火事になったマンションに残っている人々を救助してたことがわかり、すごいと思った。

家にいるとすごくこわくて、遠くへ避難したかった。電話がかけられなくて、かかってくるのを待つしかなかった。明るくなってびっくりしたのは、お風呂の浴そうとガスがまが前に出ていて外が見えてたことと、テレビがピアノにおされて、前に出ていたこと。あと、火事が青木市場からでて、昼ごろまで燃えてたり、近くがいっぱい燃えたり、周りの平屋がかたむいたりして、声が出ない

ほどびっくりした。

2日目になって、やっとお父さんの会社から電話があって、1週間ほど関西国際空港の近くにとめてもらうことになった。でも、甲子園から梅田までしか電車が通ってなかったから、甲子園まで3時間ほどかけて歩いた。すごくつかれたが、むこうに着いて温かいお茶をのみ落ち着いた。でも、夜はなかなか寝れない日ばかりでした。

青木に帰って来た時には、1回みただけ信じられなかった。余震がいっぱいあり、私たちが大阪の方に行っている時に震度3の余震があったそうで、こわかったみたいです。今でも一人でいると、なんかこわく心細くて、テレビとつけてうるさくします。夜ねるのも眠れません。今思えば、なんでこんなになるのか不思議です。早く元通りになって、学

校でみんなで遊んだりしたい。

地震後の暮らし

西宮市立大社小学校 4年 中北 麦

1995年1月17日5時46分、大きくゆれる物体が、ぼくたちを10秒間ほどおそい、被害だけを残して去って行った。

その正体はとてつもなく大きな地震だった。

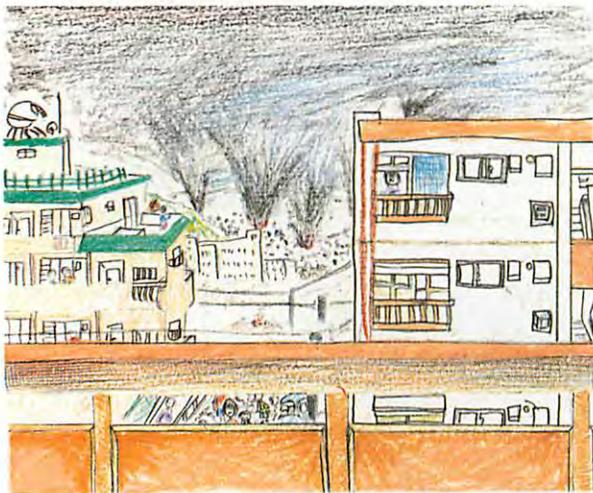
地震がさると真っ暗やみ。地獄へでもおちたのかと思っています。日が差して来た。ぼくははりの下じきになっていて、3時間がかりの大人4人で助けてもらった。

姉は亡くなった。その姉のことが2回、新聞に出た。その内の1回が、おおげさすぎた。ぼくは、とてもはらがたつた。亡くなった人のことをおおげさに新聞にのせるなんて、ゆるせなかった。学校では学校のみんなが、ぼくの姉や5400人以上の人のことを、悲しく思ってくれた。その面では、ぼくはとてうれしかった。

地震から1か月の2月17日正午、学校中のみんなでもくとうもした。日本全国の人が亡くなった人たちのめいふくをいのり、もくとうをしたそうだ。

こんなありがたみもほうっておいて、ぜいたくをしているぼくは本当のばかだ。勉強ができないのはばかではない。その人自しんが努力すればいいのだ。ぼくはそのことを信じている。でも信じていて実際にあまり行動をしていないぼくは、人間としてだらしがなく、はずかしい。

避なん所の人、学校の生徒、先生方は、皆、大社ファミリーといわれている。ファミリーで助け合い、そして立ちなおる。そう考えて、被災者の人たちはがんばっているのだ。



1月17日に私たちが住む神戸に大地震が来ました。
地震が治ったあと、人たちは学校の方へ向って逃げたりと
来ました。下の方の空は、黒い煙におおわれて、空一面黒
い空でした。私のお家の上の空は青い煙なのに下の方の空は黒色で
見えるはずの海も見えませんでした。1日1日下から赤い火
が燃え上りました。山はくずれて、家が危なげな学校へ来た人も
いました。私は海を見ることが出来ず、黒い煙を思ひ出し

1194
神戸市立住吉中学校
2年
橋本 道子

だから、自分もがんばらなくては、
と思う。

今回の地震を味わったぼくたちは
運の悪いような、何百年、何千年に
1回の地震を味わって運の良いよう
な気がする。

そして、地震が教えてくれたこと
は、地震のおそろしさと、人の心の
温かさ、そして、第一に命の大切さ
だった。

てん校

北淡町立富島小学校2年 ひらいたくや

地しんがあったので、ぼくは、お
母さんが生まれた九州のみやざきに
行きました。ぼくとお姉ちゃんとお
母さんの3人でひなんしました。

そして、家の近くのあまみし南小
学校に転校しました。さいしょの日
学校へ行くと、くつのおく場所が、
わからなかったので、こまっている
と、とがしくんが教えてくれました。

てん校生がはじめてきたので、い
っぱい友だちができました。おしく
ん、大原くん、おのくん、おがさわ
らくん、たはらくんの5人です。

テレビで北だん町のことが出てく
るときゅうしゅうのみんなで心ばい
しました。1か月たって、もどって
きた時、家が少なくなっているの
でびっくりしました。みんなが、むか
えてくれて、うれしかったです。

こわかった地震

神戸市立福池小学校6年 前田康司

ぼくは寝てて、ゴゴゴと音が鳴
り、すごくゆれた。ぼくはゆれてい
たけど、地震だとは思わなかった。

ゆれた後、寝ていた横のかべがく
ずれてから、ぼくの上ののしかかっ
てきた。そして、動こうと思っただけ



北淡町立富島小学校1年 とうげこういちろう

どぜんぜん動けなくて、5秒ぐら
いたつと、お母さんがくずれたかべを
のけてくれた。

ぼくとお母さんと妹で3人かたま
っていた。寒かったので、毛布を3
人でかけて助けを待っていた。

ぼくは、地震がこの神戸に来ると
は思っていなかったので、すごくび
っくりした。そして、いつも大切と
思っていなかったお母さんと妹をす
ごく大切に思えた。

30分ぐらいうると、だれかが2階
の床を一部くりぬいた。たまたま何
かが重なっていて、ひっぱり出して
もらった。3人が生きていてすごく
よかった。

すごくこわかった地震

神戸市立福池小学校6年 道東 恵

寝ている時にとつぜん……地震が
起きて、私はタンスの下じきでした。
お父さんに助けてもらって、窓の外
を見てみると、家がこわれていて、
向こうの方で火事が起きていて、と
てもこわかったです。

私たちは学校に避難する前に、お
ばあちゃんのところが気になって行
ってみると、両方の家にはさまれて
いました。2階に寝ていた2人と、
お父さんとお兄ちゃんといっしょに、
おばあちゃんを助けようと呼んでみ
たけど、声も聞こえなかったのです。

2日か3日くらいしてやっと助け
られたのです。でも、おばあちゃん



神戸市立蓮池小学校3年 平山真歩

は亡くなってしまって、とても悲しかったです。今思い出すだけでも、悲しいです。

地震でいうのは、とてもこわくて、こんなにもおそろしいとは、全然思いませんでした。

はじめての地震

神戸市立高羽小学校4年 稲見裕明

長田区のおじいちゃんのうちに行きました。おじいちゃんの家のお後ろに、火が起きていました。おばあちゃんがにもつをもって、車にのりました。

火はおおきくメラメラもえています。その火は、パンやからずっとおじいちゃんの家の方こうにきます。おばあちゃんは、「もう、家がやけて

もしゃあないな」と、あきらめていました。道路が山のようになっていました。大開駅の上が、谷のようになっています。そこにどろ水がありました。こがたの車のまどの上までどろ水がふかかったです。大型のトラックもまどのまんなかぐらいどろ水がきていました。トラックが、上の高速道路からおちて、横にたおれていました。

自分の家に帰ると、しょっきだながたおれて、れいぞうこの引きだす方は、だいじょうぶだったけど、ひらく方が、れいぞうこの中のものがでて、また、れいぞうこのひらく方がまたしまっていました。トイレにひびがいったかべがおちそうだった。電気がつかないので、ロウソクのろうをコップのうらにぬって、トイレや、かたづけにつかっていました。

悪魔が襲った

神戸市立烏帽子中学校2年 伯谷美保

息苦しいほどのガスのにおい。見なれたはずの風景が、知らない世界になっていた。

わけのわからないまま、ただ歩いた。

夢を見ていた。何の夢だったかな。悪魔に起こされたから忘れた。前の日は、インフルエンザで寝込んでいた。38.6度位熱がでて、一日中寝てた。だからたくさん夢を見た。だからきつと悪魔にゆさぶり起こされたのも、目の前に広がる風景も、全部、夢のつづきなんだって思った。思いたかった……。

はげしいゆれで、かべで頭を打った。バリバリ、ガラスのわれる音、机がたおれたり、いろんなものが音

を出して、こわれて行く。地獄の底からきこえてくるさけびのようで、さみしくてその音を聞きたくなくて、頭から布団をかぶった。うんともすんとも声ができなくて、ただ何がおこったのかわからなかった。

「みほ」「みほ」

という両親のけわしい声がふってきた。それは、真暗な中のたった一つの明かりのようで、たのもしかった。それから後は父が先頭をきって、外へだしてくれた。日曜日にごろごろしている父とは想像のつかないほど立派だった。父はそれから祖母を心配し、祖母の家へ走っていった。私はその間公園へ避難した。祖母はぶじだった。私たちは祖母の家へ向かった。

歩けば、歩くほど、ひさんだった。形にならない家がほとんどで、地面には、きれつが入っていた。どこからともなく、灰がひらひら飛んできた。私たちをせせら笑うごとくに……。

その日、明かりのなくなった神戸の空は、くやしいほどに美しく、今まで見たことのないほど輝いていた……。

次の朝、目が覚めても、まだ悪い夢が続いていた。でも本当は、かべで頭を打ったときいたくなって分かった。夢じゃないまぎれもない現実だってこと……。でも、夢だって思いたかった。明日になれば、すぐにさめるからって、自分に言いきかせてた。

その日は、ただ目的もなく、歩いた。ただひたすら歩いた。いくあてなんかなかったけど、歩いた。そして、いろんなものに出会った。主人をなくした花が悲しそうに首をうなだれていた。かい主をさがして犬がとぼとぼ歩きながら、あたりを見回して、また歩き出す。また主人が、

犬や猫をさがす。どうして、どうしてこんなことになったんだろう、そればかりが頭を駆けめぐった。

今、私は東大阪にいる。あんな恐ろしいことがあったなんて、ここにいると考えられない。でも、何度も夢を見た。夢の中で悪魔が私を襲う。今、ふりかえってふと思う。私達がカブトムシを飼うように、私達は何かすごいものに飼われていて、私達がきたない心と、自然を破壊するのに、腹を立て、私たちがカブトムシの虫かごをゆするように、ここをゆすったんじゃないかって……。ばかみたいなお話だけど私はそう思った。

私の運命は、ベートーベンの運命の“ジャジャジャーン”って演奏する間に大きく変わってしまった。運命といえば、私の祖母が教えてくれた。

「神様は、その人なら耐えられると思って、運命をくれる。だから、みほちゃんも、がんばって」って。私は祖母が理屈ぬきに、大好きだ。口では言えないようなはずかしいことでも、教えてくれる。単純なことだけだけど、祖母にウソをつかれたことは一度もない。だから祖母の言葉を信じて、この運命と戦おうと思った。

悪魔が襲ったこの町が、人々が私は好きだ。ここを離れたくない。悪魔には天使。人々が天使になって、またこの町が、本当にきれいに、天国のような町になるように願っている。たくさんの亡くなった方々のために、私達が、今がんばらなければならぬ。

そして、いつか戻ってきたい。

地震にあって

神戸市立盲学校中学部3年 井畑こずえ

地震がきたときは本当にびっくりで、「もう、この世の最後では……」と思いました。本当に恐ろしかった。あの時の恐怖は忘れられない。

地震にあって、電気・ガス・水道がストップした。今は、三つともジャンジャン出るけど。この三つのどれが欠けても困ることを知りました。今まで、当たり前のように使っていたけど、このところ電気・ガス・水のありがたみが感じられるようになりました。

でも、この災害時に一番心に感じられたのは、親戚・知り合いの人たちが助けてくれたこと。ガスが出ないときには、お風呂に入れてくれたりし、水が出ない時は、洗濯させてもらったり、ご飯をよばれたり、ポリタンクを購入してもらったり……。買い物までしてもらいました。すごくありがたかった。でも今は、自分の家がそうできる立場だから、困っている人は助けたい。

こういう災害の時こそ、助け合うことが大切だとつくづく感じた。そして、命が助かっただけでもよかったと、そう思いました。

妹をなくして

芦屋市立精道中学校3年 中島香世子

1月17日5時46分、激動の地震が兵庫県南部をおそった。

そして、私の肉親の妹を亡くしてしまった。

突然、家が揺れたので、私は夢かと思いました。

必死にお父さんを呼び、助けを求めたけれど、どうすることも出来な



神戸市立福池小学校3年 古川真希

かった。

天井は落ちてきてるし、2階は目の前だし、机やら、タンスやら、あらゆるものが落ちてきた。

私の身体の上にはテレビがのっかっていて、顔面には机がのっかっていた。なに一つ身うごきがとれない。地震がしずまり、気がついた時には、私は毛布で顔面を押し付けられていて息をするのが不可能な状態だった。

でも、必死に毛布をどけて、なんとか息はできた。

身うごきは出来ないし、目にはなににも見えない。本当つらかった。

妹を呼んでも、一言も声は聞こえなかった。でも、父の声はするから、すこし安心しました。

真っくらやみの中、父とはげましあいながら、大きな声で助けを求めました。いくら呼んでも、外からの声は聞こえないので、一時、つかれて声がでなくなりました。父と体力を保とうと言いながら、1時間半じっとがまんしてました。

すると、外から窓ガラスを割って

いる音がしたので、父と声をあわせながらさげびました。聞こえたらしくて、外の人から「大丈夫かー！」と返事が戻ってきた時は、ものすごくうれしかったです。

10人くらいで助けに来てくれました。2階のタタミをはぎとり、のこぎりで天井の板をきって私達をとりだしてくれました。

外の灯りを見た時の感動は今でも忘れられません。

そして、家から外へ出された時、家の周りに何人もの見物者が寄ってました。だけど自分で立てなかったんです。全身がふるえていて、とてもじゃないけど足がいうことをききませんでした。私みたいなブタをおんぶしてくれて、家の前の道路に出ました。一人で歩くことができなくて、人につかまりながら歩きました。本当、怖かった。

その10時間後に妹がだされた。全身、まっさおで、はなや口や耳からは血がふき出していた。まだ、体は、かたくなっていなくて、やらかかっ

た。急いで車で回生病院に行ったけど、だめだった。

阪神大震災

西宮市立上ヶ原中学校3年 松本比呂子

何が起こったのか全くわからなかった。私は、とにかくふとんにもぐった。地面の底から響きわたるような、「ゴー」という重たい音、

そして、家の中のあらゆるものが倒れる音だけが聞こえてきた。そして、まだ何が起こったのか分からず、揺れもおさまらない中、かすかに母の呼ぶ声が聞こえてきた。私は、部屋から出るためドアを開けようとした。が、部屋の中のタンスが倒れ、ドアをふさいでいた。私は、そのタンスを手でおしのけ部屋から出た。真っ暗の中、壁をつたいながら、足の踏み場のないほどの廊下を、大声で叫びながら、母の方へ行った。母が、「お姉ちゃんがタンスの下敷きになって、動けないって言ってる」と



神戸市立高羽小学校5年 松本英樹

叫んだ。お姉ちゃんの部屋のドアを開けようとした。しかし、開かなかった。ベランダから回って、お姉ちゃんの部屋に行った。

その時、ベランダから見た外の風景は、一生忘れないと思う。家々から火柱が立っていた。そして、なんともいえないような空の色。私は、足が震えた。そして、お姉ちゃんも助かり、3人で急いで外に出た。外に出た時、(助かった……)とホッとしました。

私達は、体育館に向かった。その日の真夜中、お父さんが、6時間かけて、仕事から帰って来てくれた。その時は、本当にホッとしました。

私は、この地震のおかげで、どれだけ、声をかけ合うことが大切か知った。西宮の町は変わり果てた姿になってしまったけれど、水の大切さとか、人のあたたかさをもう一度、再確認するための期間として、西宮が完全に復活するまでがんばろうと思います。がんばりましょう。

40秒間の記憶

県立淡路農業高校3年 中山和美

「ゴーッ」という音がしてきたから、「風でも出てきたのかな?」と思いつつ、また目を閉じたその瞬間、「ガタガタ」という音がして、家中がゆれ始めた。「あっ、地震」と思って、ふとんをかぶって、「ゆれ」がおさまるのを待った。が…、やまない。

そのうち、だんだん「ゆれ」が大きくなってきて、「ギンギン」という音が聞こえ始めた。

「キャー、こわい」ふとんから顔を出したとき、頭の上に「ドタドタ」と物が降ってきた。「いたーっ!」と払い除けた。

「和美、和美、起きて」という声。「あっ、お母さんだ。お母さん、どこー?」と言うと、「外に出ておいで」という声が聞こえた。

出ていこうとすると、押入の戸がドカッと落ちてきた。

これが、今わたしの頭の中に残っ

ている記憶のすべて…。

このあと、どうしたのか記憶に残っていないが、夜が明けてから分かったことは、たった40秒で多くの人が大きな被害にあったということ、こんなものすごいことが起こるなんて誰も予想しなかったということだった。

今から考えてみると、北海道の奥尻島の地震のときだって、他人事のように、「大変だったねえ」という「言葉だけのもの」でしかなかったように思う。

でも今、自分がこんなものすごい体験をしてみて分かったことは、「今度からは、自分をその立場において考えること。そして、少しでもみんなの役に立つように考えたり、行動したりすることのできる人間になりたい」という自覚が持てるようになったことだと思う。

これからどうなるのかは分からない。

家も、町も、こんなままで、一体どうなっていくのだろうか?

もうすぐ卒業だというのに、就職先の会社がつぶれてしまって、「内定取り消し」になった友だちもいる。

なにもかも悲惨過ぎる。

でも、今のわたしは、家族みんなで力を合わせ、まず「我が家の立ち直り」から頑張るしかないと思っている。

辛かったこと

県立東灘高校3年 奥 幸輔

1995年（平成7年）1月17日、午前5時46分、地震発生。

最初、「久々に暴走族」と思っていると、揺れはおさまらず、物は倒れ、割れ、僕自身も、天井近くまである本棚が自分の上に倒れてきた。気がつくやうに、向こうの部屋から父が「幸輔、幸輔」と何度も叫んでいました。でも、この時僕は別にそんな大声で叫ぶことはないと思っていた。他にも同じように思った人がいると思う。

その後、家族3人で、玄関のドアを開けると、そこは暗闇の世界、無音の世界、唯一聞こえてきたのは、

倒れた高速の方からくるクラクションの音。今でもしっかりと覚えている不気味で悲しい音で、それが鳴り続いていました。

その後、僕にとって今回の地震で2番目に悔しかったことに出合った。それは、水や食糧なんてことではなく、その直後町を歩いた時のことです。初めて見た家屋の倒壊、その中で、生き埋めになっていた人たちに対して、自分が何もすることができなかつたことです。若い女の人に頼まれて行ってみると、全壊の状態でした。自分の無力さに腹が立った、辛かった。

友達の両親が生き埋めになっていると聞き、倒れた2階から中へ入ると、ガレキの中に足が見え、息があったのですが、自分たちの重さで崩れると思い、考え、何もできず出てきた。なさけなかつたです。10日後、そのお母さんから電話があり、「奥君らの声が聞こえて、とても嬉しかった」と話され、僕はそう言われ悲しかった。そして、辛かった。

その後、芦屋のグラウンドで10日ほど車の中で暮らしていました。初

日、御飯はどうなるのだろうかという時、同じ場所にいた同級生の女子が、「これ食べて」と、おにぎりをいただいた。涙が出るほど嬉しかった。「ありがとうございます」。

その後、僕にとって最も辛く悲しい、そして、無性に腹の立つことに出合った。それは、日に日に確認された、「友人・知人の死」でした。3人圧死でした。

「なんで死ななアカンねん、何か悪いことでもしたか？」とにかく腹が立った。誰にこの怒りをぶつければいいのか。ほんの2、3日前に話し合っていた人が、今はもういない。何でなんだ！！

クラスの女子の告別式が、2月26日行われた。雨がパラついていた。彼女の、そしてみんなの気持ちを物語っていたようだった。きれいごとに聞こえてもかまいません。「彼ら彼女たちの分まで頑張ります」と言います。

今後、絶対に何の別れも告げず、友人・知人と二度と、決して別れたくない。二度と。



神戸市立高羽小学校5年 きし なおや



「水くみはなにをやるよりたいへんだ」
神戸市立高羽小学校5年 加藤大志

兵庫県南部地震について

県立兵庫高校1年 播磨大作

いつもの通りの朝だった。ちょうど、3連休の終わったあとで、今日から学校に行かなければならないはずだった。しかし、その朝は忘れられないものとなった。

ものの20秒だった。街は消えた。道は隆起し、陥没し、家々は崩れ、壊れた。真っ暗な中、あわててパジャマのまま、僕らは通りへ出た。通りでは、同じように家から着の身着のまま飛び出してきた人たちの声が飛び交った。ガス臭かった。どこかでガス管が破裂したようだ。暗い視界の中で空だけが赤かった。火事が起きたようだ。こうして街は消えた。

余震が起きる度に、避難所の人々はざわめく。全く見ず知らずの人間同士が励まし合う。夜は寒い。閉め切った避難所では、風邪もはやる。子どもが泣く。ミルクもおしめもない。人は不安と寒さの中、身を寄せ合って夜を過ごす。窓の外で、赤い

光がずっとついている。火事だけでなく、人も眠れない。

人の心は乱れる。みんな自分のことしか考えられないようだ。腹は減る。食べ物はない。水もない。電気もない。ガスもない。当たり前だったことが、本当に今まで当たり前だったことが、今はもうない。

多くの人が手をさしのべてくれた。うれしかった。配給で回ってきたおにぎり。美味しかった。友に会えた。安心した。知人の死を知った。言葉を詰まらせた。水の配給に走った。ポリ容器の重さは、自分の辛い心と、よく似ていた。

天災はどうしても起こるもの。その時、人はなすすべもなく、ちっぽけで吹けば飛ぶようなものであることを知る。思いはつきない。思い出はきれいだった街並みの楽しい遺物。空は青い。海も青い。心は暗い。街も暗い。

闘いは始まったばかり。光はいつか来るもの、心に街に。

ファイト

県立芦屋南高校2年 高田和泉

背中を突き上げるような揺れで目が覚め、ガラスの碎ける音と柱の裂ける音で頭が醒めた。何十秒、何分とも思える激しく長い揺れが収まった後、父の叫ぶ声に、声にならない声を発した。外の冷気が部屋に潜り込んで、自分の身体に触れた時、私の恐怖は極限になった。散乱したガラスを裸足で踏みながら、両親の寝室に行った。階段から下りようと思うが、3段目から下は既に瓦礫に埋まっていた。南側のベランダづたいに逃げ道を探し、近くの非常階段からやっとの思いで地面に足をつくことが出来た。表に回って、真っ白な頭で私が見たものは、1階が既に無く、2階が隣の家に覆いかぶさるように傾いている我が家だった。この家ですごしてきた10年間の思い出や感慨が音を立てて崩れていくように思えた。辺りを見渡すと、隣の家も、向かいの家も、皆瓦礫と化している。

パジャマに毛布を引っかけたまま小学校の校庭に行ったが、夜があけるまでの1時間は私の人生の中でもっとも長い1時間であった。自然と周りに人が集まり、低い声でしゃべり始めた。話さなければ気が狂いそうな1時間であった。

夜が明けて、皆はそれぞれの家に戻り始めた。近くの家では、その家族と思われる人が、崩れた家の瓦礫を掘り起こしている。そのうちに畳にのせられ毛布をかぶせられた人が出てきた。人間として側にかけ寄って畳の端を持つ勇気がほしかったが、私の足は竦んで、ただ茫然と見送るだけであった。

車庫から取り出せた父の車の中で、しばらく寝た。意識はさめたままであったが、今ある光景が夢であることを祈った。目が覚めて現実に引き

戻されても、車から外にでる恐怖に打ち勝てなかった。家から取り出せた2~3枚の洋服にやっと着替え、父は車を出発させた。

夕暮れが近くなって、祖父の家にたどり着き、親戚の人たちが集まってきた時、私は初めて泣いた。この長い1日の後で、初めて人間としての感情を持ちえた瞬間であったと、今思う。

震災という、極限状況の中で、自らの弱い面ばかりがでて、自分自身がいかに無力な存在であるかを感じる事がよくある。生きてきたのは自分自身の力によってではなく、私を取り巻く周囲の人に生かされてきたことを意識する。この震災を通して得た、周りの人々とのつながりや触れ合いが、私の精神をさらに向上させてくれるように経験となったにち

がいないと思う。

毎朝、阪神電車の車窓から、瓦礫となった家々を見る。今までは気にも留めなかった家々にも、この一つの大きな震災を通じて、人と人とのつながりや触れ合いを共有でき得る人々が住んでいると思うと、その家々に住む人々がとても近い存在に思えて、思わず「ファイト」と小声で叫んでしまう。



神戸市立高羽小学校5年 葉山善久

■ 教職員にとっての大震災

あの1月17日

県立芦屋高校教諭 川根耕一

いつもの様に午前5時45分からの天気予報を聞いていると、地響きとともに激しく揺れだした。家が倒れると思った程の揺れの割には、幸いにも被害がほとんど無かった。また、10分後にはテレビも映り、ニュースで震源地と規模の大きさを知ったが、近所の様子からは想像もつかなかった。ただ、避難者のために体育館を開ける必要があると思った。

午前7時過ぎ、尼崎の自宅を自動車を出た。3時間経ってようやく、北今津の近くに着いた。ラジオが次々と、被害の様子を伝えていた。また、ラジオを聴いて、渋滞のひどさを知って、次第に事態の重大さがわかってきた。そこで自動車を諦め、自宅へすぐひきかえし、自転車に乗り換え学校へ向かった。

国道2号線を行くと、川を越える毎に被害が大きくなり、夙川を渡ると、完全に潰れた家があちらこちらにあった。古い家はほとんど潰れている。人がいない。潰れた家の中にいるのだろうか。何故か涙が出てきた。

午前11時半頃、やっと学校に着いた。体育館前の家が潰れて、電柱を押し倒し、その電柱が柔道場に倒れ掛かり、電線が垂れ下がり、危なくて通れない。学校には、5、6人の

教諭がみえており、体育館は既に開放されていた。相当酷いだろうと思っ
てはいたが、体育準備室に入ったところ、足の踏み場もない、無残な状態に唖然とした。

体育館には養護のF教諭が来られていた。F教諭は保健室から薬品の全てを体育館に運び、既に何人もの手当をすまされていた。F教諭から学校の様子も聞いた。中館、南館は中に入れる状態ではなく、校長から

の指示により、ロープで立入り禁止の処置がしてあった。本館も電燈はつくが、水が吹出していて、水びたしだった。体育館は、体育科のF教諭が7時過ぎに開けられたとのこと。それでも開ける時に、避難者から、「遅い。もっと早くこい!」と怒鳴られたらしい。

2階フロアの、250人程の避難者は、生気が全くなかった。防寒用に要らなくなった柔道の畳を運んでも



見る影もなくなった建物跡で冥福を祈る（神戸市長田区）

らった。元気そうな人でも、自分だけの行動にはしり、協力してもらえなかった。病弱な方や、お年寄りの分は、後で1人で運んだ。自分勝手なものだ。こんな時こそ、心にゆとりが要るものだ。そのうち避難者の中に本校の生徒や卒業生の顔が見えた。ボランティアを呼びかけたら7、8人集まり、心強く感じた。

そのうち、午後1時頃になって、生徒指導部長のK教諭がこられて、校長、教頭、県教委に電話をかけたが、全く通じず、芦屋市役所だけがやっと通じた。市の方では、芦屋高校に避難者がいることを把握していなかった。3時過ぎになって、やっと担当者が見えたので、以後、避難者の受け入れについて打ち合せた。

朝からの救出作業や家財の持出し等をした被災者が夕刻になって、泊る場所を求めて続々と避難してきた。この日の夜以降の避難者数約1800人。中には、神戸市からの避難者もいた。体育館の1・2階、柔道場だけでは足りなくて、グラウンドにも自動車約30台。本校は一大避難所となった。それに伴い、市職員1名と本校職員数名が泊り込み、対応した。

この様に地震当日は、余震が続く中、不安と混乱のうちに過ぎてしまった。

反省

県立兵庫高校教諭 椿原健作

1月17日午前11時頃学校に行った。西神戸有料道路の鶴台料金所から南に下ってきたが、町の様子はいつもと変わらないように感じた。車窓から見えていた景色が一変したのは名倉町の辺りからで、とても昨日までの同じ町とは思えなかった。

学校に着くと何人かの先生がすで

に出勤されていた。その時点では、避難なさってきた人はそれほど多くなかった。グラウンドにも車はほとんど入っていなかった。学校に人がどんだん入ってくるのは予測できたが、何をどうしてよいのかわからずに手をこまねいていた。

校長先生が姫路を車で出発されたと聞いて待機することにした。職員室にいて火事が広がるのを見たり、西市民病院のあたりで消防車の赤いランプが無数に明滅するのを眺めていた。午後5時頃になって到着されなかったのが、当日集まっていた職員はホワイトボードに書き置きを残し、それぞれ家に戻った。

1月18日、朝から水を確保するために奔走した。加古川の義兄の家へ水をもらいに行き、知り合いにも配って回った。学校に行ったのは夜になってからであった。この日の行動について、朝から行くべきではなかったかと胸が痛むが、家族の水を調達することを考えるとどうしても出勤できなかった。

翌1月19日の早朝から、2月8日、2年生が本格的に鈴蘭台高校に登校し始めた日まで、1日も休まずに学校に通って被災者の世話をした。

その頃、活動していたのは湊川高校と兵庫高校の職員が主体で、避難者も自発的に行動する方はほとんどいなかった。そんな中で来る日も来る日も、トイレの掃除やゴミの片づけをした。もちろん食料の搬入や配布、水の配給なども行った。

食べたなら出るのは当然だが、水の出ないトイレほど腹立たしいものはない。仕方がないので人糞を手でつかみ、新聞紙に包んでビニール袋に入れて捨てた。仮設トイレが設置されたので校内のトイレは使わないでほしいと呼びかけてもいつも大便が何か所ものトイレで見つかった。ク

ラブハウスの周囲やプールの辺りにもたくさんの野糞があった。最初はやむを得なかったにしても、仮設トイレが設けられても後を絶たなかった。毎日大便の片づけをしていると服や靴の臭いが取れなくなった。清掃の協力を訴えても人は集まらず、結局はボランティアがやっていたような状態であった。

マスメディアで流されるような感動的な話、希望がもてるような話はほとんどなかった。そうした中で、おれは何でこんなことをしているのだろうとよく考えた。自分の活動が善意や慈しみの心から出発した行為とはどうしても思えなかった。「なんで自分の糞くらい自分で始末できんのか」「ひとがトイレの清掃をしといたら、使っているあんたらもしたらどないや」と途中で叫んでいる始末。人間がイヤになるわ、詰まらぬ不平をもらっている自分が情けなくなるわで、ほんとうにつらい日々だった。

毎日義務感だけで動いていたような気がする。おれは公務員で給料を貰っているのだから、生徒がいなくて学校が避難所になっておれば、世話をするのが務めだと、自分自身を説得しながら働いていた。逆に学校が避難所になっていなかったとしたら、ボランティア活動をしたかどうかと、自問すると、少し恥ずかしい。

しかし、教え子の中には素晴らしい生徒がいて教えられることが多かった。決して不平不満を言わず黙々と働く。背中の人を動かせるような若者がいる。いくら年を重ねてもつまらない人間はたくさんいるが、若くても人物はいるものだ。普通の授業では見られない側面を見ることができ、頼もしく嬉しかった。

最後に、自分のとった行動で最も反省すべき点は大地震当日のこと。学校で待機していたとき、どうして

町へ出なかったのかと悔やまれる。避難してきた人に対して何もできずに手をこまねいているだけならば、(実際、何もできないということがよくわかった) どうして町へ出て人を助けなかったのかと、日が経つにつれて自責の念が強まってくる。

もうあんな地震はこりごりだが、もし、起こったとしたら、自分と家族が無事であったならば、他人の命を1人でも多く助けるため、絶対町に出ようと、今は、決意している。

地域の住民と職務の狭間で

神戸市立千歳小学校校長 泉山克子

ゴムマリのように跳びはねた5時46分。わが身を押さえられない振動、何も考えられない空白、成るがままに20秒程の時が過ぎ去る。その間ドーンと洋服ダンスが倒れ後頭部を一打。ガチャンガチャン・ドドドド…大音響。気が付いた時、部屋の中は足の踏み場もない。2階に声を掛け、懐中電灯を持ち外に出る。近隣の人達の顔を見合わせ安否を確認し合う。

全壊の隣家へ声を掛けるとガレキの中から声が聞こえ、生存を確認し、西側の家にも外に出て来るように催促をする。その時遠方から「息子が挟まれている！」と叫ぶ奥様。若者を集めるべく「手を貸して！Iさんの息子さんが挟まれています」と、まわりの住宅の安否をさぐりながら大声で救助を求め歩く。

いか程の時が過ぎたか記憶にはない。「学校！」と頭をよぎった。その時である。西隣4軒目あたりからゴーッと10m位の真っ赤な火柱があがった。水！水！水！ 気が狂うように叫ぶ人、しかし水はなし。バリバリ、ドーンと住宅が朽ち落ちた。こ

うなると我が家に火が迫るのも時間の問題だ。時を待たずみるみる火が迫る。落ちて来る隣家の燃えがらを払い退けるため、残っていた湯水に手当たり次第の物を浸し燃えかかる壁に投げつけて火の粉を払う。植木鉢も消火剤となり必死の消火活動だ。ちょうどその頃一瞬にして風向きが変わった。信じられない。危機一髪……我が家は辛うじて残った。いや地域の皆さんに残してもらった。感無量である……。

皆さんにお礼をも言えないまま、火の手がやや下火に近づいた頃、学校に行くべく名簿を抱えて駅に走った。途中は悲惨な光景である。はやる気持ちを抑えて走った。なんと言うことか「ない！JR六甲道駅が」。ズタズタに破壊されて啞然となる。

動揺しっぱなしの気持ちを自分に言い聞かせて直ぐとって返し、自動車再出発。しかし道路は倒れた家屋に阻まれ、隆起や亀裂が走るうえに信号もない。それでも車の流れに入ると動くであろうと突っ込んでみたが走れない。パニックである。じっと我慢の時だった。3時間が過ぎただろうか、道程4分の1も進んでいない。だんだんと気が焦る。でも……しかし……断念。

もう夕方であった。残されたのは電話だ。あちこち探し求めた一つの電話に長蛇の列。待ちに待ってダイヤルを回すが連絡がつかない。とにかく情報が無い(何しているんだろう)。苛立ってくる(相手の状況がつかめていない)。そこへ北区から実弟が単車で訪ねてくれた。「生きているよ！ 連絡がつかない。学校へ電話を頼む。連絡のつかない時は、教頭宅へ遅い時間でも伝えてほしい」と要件を書いたメモを渡す。三角トレード式だったが通じただろうか。…このマスメディアの時代に無と化

した大都市のパニック。

この葛藤はどう表現したらよいのか。時折りくる余震に怯え、火の海に怯え、やるべき仕事も思うように捗らず、身の置き所がない。ただただ心を落ちつかせようと言いきかせているそれだけである。

「学校はどうなっている？」「子どもたちは？」「地域は？」「先生は？」めぐり来る不安を……地域の住民と職務との狭間に立って揺れ動く自分は学校のなにもものでもない。

職務を放棄せざるを得なかったこの状況下の胸の内は誰にも伝えることはできない。この悔しさを判ってほしい。

夜は炊き出しを手伝い、キャベツの葉をちぎってかじり、おにぎりをほおばり車の中で夜の明けるのを待った。

私の1月17日

県立芦屋南高校教頭 田原美生

大震災の日の1月17日、明日は推薦入試の詰めをする大切な日であることを思いながら床についた。突然の振動に目が開いた。今までに経験したことのない強い突き上げの動きだ。2階のガラスが崩れ落ちる。ふすまの代わりにいれてあった木の障子がやぐら炬燵の上にかかり私の身体を覆った。

大きな揺れがきてそのまま2mは南にとばされ2階が崩れ落ちてきた。肩の上に天井が落ち手も足も動かない。まっ暗で何も見えない。首を動かすと壁土がばらばら落ちて息苦しい。2階で2人の子どもの家内の声が聞こえる。

「でられへん」と息子が叫んでいる。「助けてください」とわめく。家内に

「警察か消防を呼んでもらえ」というが何も答えない。

それから何時間たったか。だれかが垣根をこえて瓦を踏んで近づいてきた。「どこですか。声を出して下さい」「ここにいます。動けません」手で瓦礫を掘り出している。この人の心臓の鼓動が聞こえてくる。「ひいひい」という声に変わる。モルタルの壁を手で割ってくれてやっと薄あかりが見えだした。息が急に楽になった。壁土のいっばいついた身体を引っ張りだしてくれた。助かった。「ありがとうございます。どなたですか」と尋ねると「通りがかりのものです」と走り去った。「ありがとうございます」と後ろ姿にお礼をいうことしかできなかった。

町の姿をはじめ見て驚いた。30数軒ほどある通りの殆どの家が倒壊している。新幹線の架橋が阪急電車の線路に落ちている。隣のこの家だけはとっていた家も倒壊している。通りにいる人達は茫然として何をしようかわからない状態だ。家族と近くの小学校へ歩きだした。しかし、なぜかまた町に戻ってきていた。

私の隣の家は4人埋まっているという。バールを借りて高い塀をよじ登る。2階の屋根に上がり「どこですか」というと「ここに子どもと2人います。隣の部屋に母がいます。おばあちゃんは下にいます」と返答があった。

通りにはかなりの人がいるが誰も何もしない。大学生が2人通り過ぎて行く。「おおい、今日は学校はないよ。人を助けてくれ。裏門を蹴破れ」「入れません」屋根から降りてバールで門をこじ開ける。大学生が窓を蹴破った。1人助かった。私は2階の壁をはがす。その下はガラス窓がびったり母子を押しつけている。ガラスをそっと割り毛布にしっかりと小

学生を抱いた母親を引き出した。あとは1階の92歳のおばあちゃんだ。バールで穴をあけながら掘り進んでいく。ぐらぐらと余震がくる。神棚が見える。その神棚の下で寝ていたらしい。大きな梁が落ちている。「おばあちゃんはきっと床の隙間で無事ですよ」としか言えなかった。

家内が呼びにきた。高2の息子の親友が埋まっているが、助ける人がいないという。走って行った。母親が泣きわめいて子どもの名を呼んでいる。1階のどの部屋にいたかわからない。家を解体するしかない。息子と2人で屋根に上がった。大きな廃材を下の人に渡す。何時間やったか。遅々として進まない。

高校生が次々とやってきた。みんな黙々と手伝っている。「ガスがもれている」と叫ぶ人がいる。自転車を借りて交番へ行く。お巡りさんはそれどころではないという。戻って道路を封鎖し喫煙と単車の通行を禁止する看板を置く。町の会館を開けてもらい震えている老人と子供を案内する。解体していた家で何かが動く。一瞬母親が喜ぶが猫であった。やがて柱の直撃を受けた遺体を取り出す。

携帯電話を借りて勤務校と連絡を取るが回線が繋がらない。小学校に行き顔見知りの教頭と話す。1500人はくるからと全教室を空けるよう依頼する。水がない。援助もこない。息子と井戸へ何回も汲みにいって教頭に渡す。赤ちゃんと老人用だ。ここは教頭がいて学校が動いている。私は出勤できていない。西の空が煙っている。学校はどうなっているのだろうか。

震災の時、私は

芦屋市立宮川小学校教諭 北尾文孝

その前の夜、この3連休も終わったなあ、あとは、市内公開授業までなだれ込むような日々が続くんだ、と思いながら眠りにつきました。しかし、その眠りは、あの激しい揺れで一気に覚めることとなりました。

最初の揺れで、目を覚ました後、山梨県出身で私よりは防災意識の高い妻の「もう1度くるわよ」という言葉通り、激しい横揺れがありました。私は、とにかく、家族を抱きかかえながら、揺れのおさまるのを待ちました。

寝ている部屋は、大きな和ダンスの上半分がずれ、子ども達の上に落ちかかっていた。台所は、食器がみずやから飛び出して、ほとんど割れていましたし、本棚もすべて倒れ、本が割れたガラスまみれになっていました。

とにかく、1歳と8歳の子どもを毛布にくるんで、まだ暗い外に出しました。そして、ガラスと本の間から、車のキーを取り出し、なんとか、車の中で、子ども達を寝かせることができるようになりました。

家の中の様子がわかってくると、「水と食糧を買いにいってほしい」という妻の声。さっそく、車で、近くのローソンへ向かいました。

途中、アスファルトにひびが入った道路を通りながら、これは、ただの地震ではないなと思いましたが、その時は、それほど深刻にも考えませんでした。

ローソンでは、すでに、レジの前行列が出来ていました。もう水は売り切れていましたし、地震のため、商品は床に散乱して、少々殺気だっ

た店内でした。氷と水がなくても食べられるものをかごにいっぱい詰め、列に並びました。まだ、電気が止まったままで、レジの機械が使えず、電卓で計算していたので、かなり時間がかかりました。

そのうち、このローソンの店長が現れて、新しく店に入って来る客を止め始めました。日も昇り、明るくなってくると訪れる客も多くなりましたし、レジもかなり待ちましたので、何かのきっかけでパニックになるかもしれないという緊張感がありましたが、怒り出す人もなく、少しずつ列が短くなっていくことをうれしくも、心強くも思いました。

家に帰った頃には、電気が復旧していました。テレビが伝える神戸・芦屋の様子は、想像以上の地震のひどさを、私に思い知らせるものでした。

家の中のガラス等の始末をして、すぐに学校に向かいましたが、どの道も渋滞で、2号線に入ったとたん全く動かなくなり、結局、家族のことが心配で、引き返しました。

今回の地震は、幼い子ども達と、退院後で足の不自由だった妻との家族というものを、それまで以上に意識させるものでした。

私にとっての1月17日

西宮市立大社小学校教諭 藤川英弐

淡路島・阪神間を直撃した大地震から早や9か月が過ぎようとしている。町中のすみずみまで復興の波で人や車が溢れかえっていた当時と比べて、ライフラインの完全復旧と町の復興が急激に進みつつある現在、記憶から少しずつ薄れようとしている今日今頃である。1月17日、朝、

勤務校へ向かう。勤務校までの道中は自宅からバイクで15分位、その間の光景は、映画のシーンか悪夢か……。あまりの被害の大きさにただ嘔然とするばかりであった。

学校に着くと、近隣から避難されてきた人達を気づかいながら、先着の先生方と情報を交換し、避難場所としての役目を果たすべく何をどう動けばよいのか、ただあせるばかりで受身の行動故、非力な自分をただうらめしく思うばかりであった。日頃から地域と共に歩む努力を心がけているつもりではあったが、こんな非常事態の時こそ、何か支えにならなければとマニュアルにない手さぐりの仕事であった。

まず、避難場所が安全で、広く、使いやすいように体育館・教室・ワークスペースを点検整備して見て回った。避難者を気遣いながら、声をかけ、机や椅子、ロッカー、倒れやすい物等をいっしょにすみに寄せ、余震に備えた。情報源として校舎内のテレビの作動状態を見て回り、少しでも不安を和らげた。

その間、続々と、避難者がつめかけ混雑してきた。そうこうしている内に、生き埋めの救出作業に男手が現場に急ぐ事になった。やがて、犠牲者の遺体が運ばれてきた。遺体の搬送に合わせ、遺体安置場所を会議室に設け、氏名確認や遺族の対応に当たる。私にできる事は、運ばれてきた遺体を丁重に迎え、ご冥福を祈り、氏名確認の名簿作りや遺族の方々の悲しみ、疲労、不安を少しでも和らげるよう努めることであった。

午後になり、児童の安否が気になり、バイクで校区巡視に出た。今思えば、その時取った行動がチームワークから外れ、その時点に優先すべきものではなかったと反省している。児童の安否を思う気持ちを押さえき

れず学校を後にした。倒壊した家々や寸断された道路を見て、自然の猛威の激さと人間の無力さを痛感し、余震の不安の中、どこをどう走らせていたのやら、その時、後方から、「先生、大丈夫！」の声に ふと我にかえり、無事な児童の姿に接し安堵の胸をなでおろした。倒壊した家の児童や家族の人は無事に避難したのだろうか。

我が家にも、二人の子どもを残して出てきた故、自宅に引き返し無事を確認した後、沿線に住家をもつ兄弟や親類の安否確認の連絡に奔走する。混雑と混線の中で夜を迎えた。

21世紀の未来都市を誇る国際都市や文教都市も、いったん街の灯が消えるとその様相が一変する。暗がりの中、本校の児童たちはどんな夜を迎えただろうか。生きた心地のしない恐ろしい体験が小さな心をどんなに傷つけた事だろう。どうかみんな無事でいてほしい。余震の不安が襲いまんじりともしないで1月17日の夜がふけていった。

1月17日 私の1日

神戸市立烏帽子中学校教諭 田村啓太

ドーン、ドーン、ミシミシミシ…縦揺れが2回、横揺れがどれくらい続いたのだろうか。タンスが倒れる。その下には、子供が寝ている。かろうじてタンスが倒れきるまでに支えることができ、家族全員が無事だった。生きた心地がしないというのはこのことか。着替えて外へ出ようとするが、隣の部屋へ行こうとしてガラスで足を切る。どの部屋も無残。何とか着替えて外へ出る。別世界。2階建の建物の1階部分がなく、空が広い。三々五々マンションの住民

が集まってきて、安否確認をする。前の家は全壊。男性は前の家の住人を救出するため力を合わせ、次に隣の文化住宅へも救出に向かう。

学校は？ この状態なら避難所を開設するために、一番近い私が行かなければ。地域の救助活動から抜けさせてもらい、歩いて学校へ向かう。あちこちで火の手が上がり、道は寸断されている。家族と一緒にいたい。

7時、学校に到着する。学校が燃えている。すでに管理員さんが来ていたので現状を聞く。その後、消火活動をするが、まさに焼け石に水。近隣の住民から話を聞き、出火の様子を知る。初期消火をしてもらったことに対してお礼を述べ、地域の方が類焼を防ぐために木を切った事を了承する。公衆電話はつながっており（家の電話は全くダメ）、並んで校長・教頭・実家に連絡を取りたかったが長い列ができていたため、諦める。

7時30分、A教諭が登校。

8時、住民が続々と避難して来たので北校舎を開放する。延焼を避けるため北校舎のシャッターを閉める。避難してきた人に、延焼してきた場合すぐに避難できるように伝える。

他の校舎や民家への類焼が心配で、学校を離れることができない。2階から上が燃えている本館のシャッターがつぶれ、1階の校長室や職員室等に火が及び、重要書類が焼失・紛失する事が心配で、管理員さんと囲いを作る。本館から離れられない。

そうしている間にも、続々と在校生から生徒や保護者の安否情報が入ってくるが、燃え続けている校舎のそばから動けない。

8時30分頃、身元不明の遺体を北館の教室に安置する。

11時、B教諭が登校。一緒に消火活動をする。誰かが来るたびに消火

しようとするが、10分も経たないうちに諦める。本館の中にいるだけで怖かった。余震があれば、すぐに外へ飛び出した。

12時、教頭が登校。一緒に消火活動をするが、3階体育準備室に延焼し、打つ手なし。教頭はすぐに連絡のため教育委員会等へバイクで直行する。保健室には熱気が入ることができず、医療品等は持ち出すことができなかった。

13時、校長が登校。自宅に戻り、家族の様子を見る。おにぎりの炊き出しをしていた。1個を食べ、すぐに学校へ戻る。

14時、C教諭が登校。ほぼ自然鎮火したので、またプールから水を汲み消火活動するが完全には消火できず。非常持ちだし書類を会議室・相談室に移す。まず、3年生の成績の入ったフロッピーを探して持ち出す。校長室の金庫は倒れていたため、そのままにする。

避難者の通路確保のため作業を続ける。

16時30分、3班に分かれて校区内巡視をする。校区内の悲惨な様子が続々と知らされるが、やるべき事が余りに多く、手が回らない。避難者の人数を確認する。

18時、おにぎり弁当150食分とリング2箱が届くが、避難者が1000名を超えているのでパニックを避けるため、明朝配ることにする。

校長・教頭はじめ数人の教師が泊まることになり、私は、家族のもとへ。帰ってみると家族は自宅にはいなかった。近所の人どこにいるのか聞いて回る。マンションの住民と近くの公園へ避難していることを聞き安心する。すぐに公園へ行く。家族の顔を見てホッとす。暖をとるための薪を集め火を絶やさないように、男性は走り回る。子どもは、不

安で眠れない。大人も順番に暖をとる。長い1日であった。

今日の挨拶は、「命があるだけでも良かったですね」という言葉だった。神戸市灘区 震度7。

生命の尊さ

北淡町立北淡東中学校教頭 風呂勇

5時46分。何だ、この激しい揺れは。何だ、この地鳴りは。恐怖。しばらくは、これが地震だとはわからなかった。脱力感に襲われ、腰が抜けた。何が何だか分からない。すぐ、家族の安全を確かめた。外へとびだす余裕は無かった。長男の布団の上には重い本棚が倒れていた。ゾーとした。わずか数cmで生かされたのだ。全員生きていた。家の中はムチャクチャだった。天変地異の前にはどうすることも出来ぬむなしさを覚えた。小学校5年の娘が、「今日、学校どうなの?」と言ったとき、はっと気がついた。こんなことをしていられない。学校へ急いだ。まだ薄暗く、自宅の様子は分からないが、何とか立っている。柱が2、3本縁石から飛んでいたが。

北淡町に入り、学校が近くなるほど、街の被害は大きい。「家に家内がいますねん」。宿直の事務員さんは心配そうだった。「すぐ帰ったって」。私は声をかけた。長い1日の始まりだった。

6時50分、小雨の中を自転車富島地区の様子を見て回った。多くの家が壊れ、倒れている。余震が断続的にあり、地表を揺るがした。人々が町民センターに集まっている。危険な路地に人が集まっている。

8時30分、職員とともに校舎を点検しているとき、「火事や!」の職員の叫び。煙は高く上がっている。理

科室薬品庫から出火した。私は何度も何度も119番を回したが、通じない。こんなことがあるのか。今まで当たり前、絶対やと思っていたことが通用しない。職員のすばやい対応で、大火にはいたらなかった。

午後1時、自衛隊のヘリコプターが運動場に舞い降りた。翌日には、学校は自衛隊と救援物資と消防団員など人でいっぱいになった。こんなことは想像だにしなかった自衛隊駐屯地、ヘリポート、徳島県医療センター、仮設倉庫、物資置き場、数日後避難所となり、地域の防災拠点となった。だだ絶句するだけ。1日も早い教育機能の回復を願った。2月下旬、運動場の片隅で体育の授業が再開したとき、生徒は久しぶりの運動に何とも言えない嬉しい表情だった。

たくさんの救援物資等をいただき、温かいボランティアの人に支えられ、急場をしのぐことができた。「家は何とかするから、俺の分まで頼むで」と夫に送られ、1か月半も避難所の世話をされた東京の婦人の方には頭が下がった。生徒にも、進んで避難所の掃除をするなど、ボランティアの芽も育っている。この思いやりの心の目を大切に育てたい。

また、半数以上の生徒の家が全半壊した。家族を亡くした生徒も8名いた。数時間瓦礫の中で救助を待ち、恐怖で声が出なくなったり、4日間も寝込んだ生徒もいた。ほとんどすべての生徒が心に傷を負った。厳しい生活が続く中、心と体のケアは必要である。

当日、登校した生徒もあった。「生命の尊さ」を思い知らされた大地震であったが、当たり前だが、第一に考えなければならない。また、どんな時でも自ら正しく判断し、行動できる能力が問われる。教育の責任は

重い。

深夜、疲れはてて帰宅。

忘れられないあの日

芦屋市立宮川小学校教諭 蟹江恵子

どれだけ時間がたったのかわからなかった。自分の住んでいるアパートはつぶれたけれど、両親の家は何とか無事。学校のことが気になり、43号線沿いに歩く。道は、倒壊した家屋でふさがれ、どの道を進んだらいいのかわからない。目の前に巨大な黒い壁が。いったいなんだろう。それが阪神高速とわかったのは白線と横倒しのトラックを目にしたからだった。目の前の光景が信じられないまま通れそうな所を見つけながらやっと学校につく。

廊下は割れた水槽の破片でいっぱい。職員室もぐちゃぐちゃ。体育館は避難してきた人でいっぱいだった。出勤できた職員で手分けして、各町に児童の安否を調査する。3人の児童が亡くなっていた。

その日、両親の家に帰る。が、目にしたのは、炎、火事だった。

震災当日のことは細かく思い出せる。数か月後、子どもたちに手紙を書いてもらったときも、どの子もその時の様子をよく覚えていることに驚いた。幼い心にも地震の恐怖が刻み込まれている。元気いっぱいにごさしているけれども、その子なりに震災を乗り越えたんだろう。

震災後6か月が過ぎ、余震もなくなり、生活も落ち着いてきた。けれど今頃から震災の影響が心に出てくる子がいる、と学校カウンセラーの先生から聞いた。これから子どもの心に気を配らなくては。専門のカウンセラーの先生に学校へ週1回来てもらっているのだから、心強い。学校再

開の日、子どもたちと会えることがこんなにもいとおしく待ち遠しいことはなかった。生きていること、その重みをずっしりと感じた。亡くなった子の悔しさ、無念さが胸にこみ上げてきた。私はこの日を忘れない。

みんな いっしょに

神戸市立兵庫大開小学校教諭 小林秀行

平成7年1月17日。午前5時46分。震度7の大地震が神戸を襲った。わずか20秒間の揺れで、住宅・学校・地域、子どもたちを取り巻くすべての環境が大きく変わってしまった。

17日は、ちょうど「卒業文集」の原稿用紙を取りに行く予定になっていた。しかし、それどころではなかった。学校には2000名を越える方々が避難されていた。また、校区も全・半壊の住宅が多く、子どもたちの安否を確認することも容易でない状態だった。

そんな中、20日ごろから子どもたちの情報が学校に寄せられてきた。職員は「学校再開」に向けて必死だった。再開の方法についても、何度も話し合った。その結果、2月6日から子どもたちを集め、2時間授業を再開することになった。6日には、半数を越える約60名の6年生が登校してきた。この日に、「体育館で卒業したい」という意志を、子どもや保護者に伝えた。

日に日に、登校してくる子どもの数が増えていった。しかし、疎開先が全国各地にちらばっていたため、どうしても登校できない子どもたちもいた。電話で何度も連絡をとるうちに「卒業式は、ぜひ兵庫大開小学校でしたい」という子どもや保護者の、切実な願いが聞こえてきた。

担任として、何とかこの願いをか

なえてやりたいと思うと共に、「このような時だから、これくらいいい」というのではなく、「このような時にしかできない、卒業式」を考えていきたいと強く感じた。

例年なら3月に入ると、卒業式の練習が始まる。しかし、今年は、体育館の移動をお願いするところから、始めなければいけなかった。避難されている方々の理解もあり、3月23日と24日の2日間、体育館を子どもたちのためにあけていただけることになった。練習は、必要最小限にとどめなければならなかった。場所もなかった。寒風の中、運動場でも練習をした。そんな練習を、避難されている方々が、温かく見守ってくれた。また、最後の練習では、代表の方が、子どもたちに話をしてくださった。

卒業式当日、開式1時間前に電話があった。「今、大阪に着いたところです」。新潟に疎開していた子どもの保護者からである。「待っていますから、必ずいらしてください」と言ったものの、気が気ではなかった。予定より10分遅れて卒業式が始まった。この日だけ、登校してきた子どももいる。

しかし、どの子の表情も喜びに溢れていた。学校長の話はもちろん、今年は、避難されている方の代表がお2人も話をしてくださった。式場には、卒業生・在校生・保護者・職員、それに、避難されている方も大勢出席して下さった。中には、避難所を出られた方もいらっしゃった。みんながいっしょに、祝った卒業式だった。

みんなの春は いつ

県立兵庫高校教頭 佐野駿介

何もかも狂ってしまった

元に戻らないほど

竣工式の あの 晴れやかさも

センター試験の あの 緊張も

しめ飾りを付けたまま

玄関の表札が

地面を営めている

ウメは玄関の前で明るく咲いた

サクラの蕾も

膨らんでいる

みんなの春は、いつ来るのかな

あのいたましい震災から、もう10週間以上になる。記憶が定かでないが阪神・淡路大地震発生直後の2、3日の状況を振り返ってみる。

地震が発生した時は、まだベッドの中で「春眠暁を覚えず」であった。前夜珍しく高熱があったので大事をとって医者に行くつもりでいたが、突然の大きな揺れに、たたき起こされた。家は加古川のため、大きな損傷もなかったが、いざ出勤をと思った時には、JRも山陽電車もストップ。家から見える加古川バイパスも自動車がいったいどビクとも動かない。

その間に、校長・事務長に連絡を取り学校近くの先生にも連絡を取った。大変な状態に陥っていることは分かったが、学校の状況を知ることはできなかった。そのうち電話はパンク状態となり通話不可能となった。

翌朝、M先生の自動車に乗せてもらい、北の方から神戸に入る。学校のすぐ近くまでは、それ程とは思わなかったが、近づくにしたがってその被害の物凄さが分かってきた。

学校の玄関に入ってまず驚いた、足の踏み場もないほど大勢の人たち

が毛布にくるまって寝ておられ、事務室・校長室の入口の前にも避難の方が寝ていて入れない。3階の湊川高校会議室に上がってみると両校の校長先生と20名余りの先生方が待機していた。その時点では本校に2000名余りの避難者がいることを、市や区の対策本部は認知していなかったと思われ、食糧・水・毛布などの物資はほとんど届かなかった。昼頃になってやっと乾パンが届いた、十分な量ではなかったが配給することとした。体育館へ運び込み2人に1パック（5枚）の割合で配った。夕方にはバナナが入ったが、弁当は届かず。仕方がないので、夕食とは言わずにバナナを1人に1本ずつ配った。夜になって電気はきたが水は届かず。それにしてもホッと明かりだった。

それから食糧・水・毛布等物資の調達、それらの搬入・分配、そして山盛りになった排泄物の処理・仮設トイレの調達・住民トラブルの仲裁等々、避難住民との永い永い避難所兵庫高校が始まった。

現在、まだ約1000人の避難住民が生活している。生徒は4月から鈴蘭台西高校の運動場に建てられた仮設校舎で新学期を迎えることになっている。生徒たちが本校に復帰して、本来の兵庫高校の騒がしさが戻ってきたとき、本当の春になると思っている。